

パワーと多様性の都市ニューヨークをサバイバル ニューヨークを生きる

ニューヨークには未知のエネルギーが詰まっている。アートや音楽から学究に至るまで、自らの目標を達成するために日々精進する者、母国の経済的、政治的混乱を避けて移り住み、葛藤を重ねる者、そうかと思えば想像もつかないほどの富みに恵まれ、それを享受する者。すべて含めて800万人のニューヨーカーがここに存在し、それぞれが語るべき物語を持っている。

文・写真／堂本かおる



第4回 「渡辺 薫：日本とアメリカのはざまで、古典音楽」



渡辺さん自身の演出によるNakaNakaのステージ。世界各国からのパーカッション奏者、鼓童時代の仲間と共にニューヨークのライブハウスにて

生まれ故郷はセントルイス

笛および和太鼓奏者の渡辺薫さんは、1975年7月3日にミズーリ州セントルイスで日系アメリカ人 Kaoru Watanabe として誕生した。

演奏者もお客さんもドキドキするんですよ。」

流暢な日本語で、渡辺さんはそう語る。渡辺さんは来日を「日本に帰る」と言う。アメリカ生まれではあるが、かつて日本で9年間暮して日本の伝統音楽を極め、その前後も毎年1度は日本を訪れている。今では日本は「外国」ではなく、「成田空港につくと、ほっとします」とさえ言う。

ハードロックとピザ

渡辺さんが生まれたミズーリ州セントルイスは、アメリカ中西部に位置する内陸の都市。バドワイザービールの本社、大リーグのセントルイス・カーディナルズを擁し、市内を流れるミシシッピ川を中心に観光地として人気がある。また、渡辺さんの両親が所属するセントルイス交響楽団は1880年設立と、全米で2

両親は共に日本で生まれ、若くして渡米し、セントルイス交響楽団に属するクラシック音楽家だった。

現在、ニューヨーク在住の渡辺さんは、今年も来日してコンサートをおこなった。自身が演出も務める『レゾナンス（余韻）』と銘打つ舞台で、2007年、2008年に続いて3度目。笛とフルートを演奏する渡辺さんと、ダンサー、ボーカリスト、陶芸家、書道家、パーカッション奏者などとのコラボレーションによる舞台を東京、佐渡島、京都で計4公演おこなった。そもそもは、かつて在籍していた和太鼓集団の、鼓童が主宰する国際芸術祭「アースセレブレーション」の一環として始めた『レゾナンス（余韻）』が、今では渡辺さん独自のコンサートとなっている。

「最初にステージ構成の流れだけ作っておき、あとは即興演奏です。

番目に古い歴史を持つ交響楽団。

市の人口36万人は黒人と白人がほぼ半数ずつを占め、アジア系の人口は極端に少なく、全体の22%。さらに日本人と日系人は合計でも僅か215人に過ぎない。（2009年現在）

こういった環境に生まれ育った渡辺さんは、「子供の頃は、もろにアメリカ人でした。」と笑う。クラスメートにも黒人と白人が多く、学校で日系人は渡辺さんと兄だけ。日本語も当時はカタコト程度しか話せず、日本人または日系人としての意識はなかった。

ハープ奏者の母、バイオリン奏者の父は共に東京の国立音楽大学を卒業後、渡米してセントルイス交響楽団に入団した。

「両親は英語で苦労したのだと思います。その苦労を子供にさせないため、家庭では英語だけを使ってい



渡辺 薫(わたなべ かおる)

篠笛・フルート・和太鼓奏者

1975年、米国ミズーリ州セントルイス出身。

両親はセントルイス交響楽団のハープ奏者、渡辺絢子とバイオリン奏者、渡辺香(はるか)。

インターロケン・アーツ・アカデミー高校卒業、ニューヨークのマンハッタン・スクール・オブ・アーツに進み、ジャズ・フルートとサクソフーンを専攻。卒業後、日本に渡り、1998年より2006年まで佐渡島の和太鼓集団、鼓童に在籍し、世界中をツアーで回る。脱退後は篠笛・フルート・和太鼓奏者としてニューヨークを拠点に世界各国、全米各地に赴き、多数のミュージシャンやダンサーなどと共演。ニューヨークでは日本文化に触発されたアーティストとのコラボレーション・ライブ・シリーズ"NakaNaka"をプロデュース。太鼓教室KWTC(カオル・ワタナベ・タイコ・センター)主宰。2010年よりプリンストン大学にて、2011年よりコルビー大学にて和太鼓クラスを担当。

www.watanabekaoru.com/

普段はいたって柔和な表情で淡々と話す渡辺薫さん。成人するまで日本語が話せなかったとは思えない、ほぼ完璧な発音。時には佐渡弁も出る

※1 小口大八(おぐちだいはち)(1924 - 2008)は諏訪市に隣接する岡谷市に太鼓道場を持っていたが、御諏訪太鼓の発祥地である「諏訪地域」は諏訪市と岡谷市を中心とする

ました。小学生になってから日本語学校に通わされたのですが、行きたくなくていつも両親とケンカしてました。小学校2、3年生で辞めましたね。」

しかし、中学生の時、渡辺さんの将来の音楽性を決める基盤になったであろう、出来事が起こる。セントルイスと姉妹都市の提携を結んでいる長野県諏訪市から、御諏訪太鼓の第一人者、小口大八氏がやってきて、太鼓のワークシヨップを開いた。1週間のワークシヨップに参加した当時12歳の渡辺さんは、その後も友人を集めて太鼓を叩き続ける。ただし、「日本の文化とか、まったく意識していなかったですね。遊びでやっていましたから。」

「当時、聴いていた音楽ですか？ハードロックのガンズン・ローゼズとか、ラップのN.W.A.、イージー・Eとか、本当に普通のアメリカ

カのティーンエイジャーでした。」音楽家の両親は夜に家を空けることが多く、夕飯はピザかマクドナルドなら大喜びだったとも言っ

■クラシックからジャズへ

この時期、クラシック音楽家である両親に「何か、楽器をやってくれ」と懇願され、たまたま近所の人が持っていたフルートを借りて練習を始めたことが、渡辺さんをミュージシャン人生のスタート地点、芸術高校に導く。

「上手いと周囲から褒められて、フルートが楽しくなりました。」フルートを熱心に練習し始めた渡辺さんは、クラシックではなくジャズに傾倒していく。中学卒業後、セントルイス市内の普通高校に進んだものの、最後の1年はミシガン州にあるインターロケン・アーツ・アカデミーという芸術高校に転校して過

ごす。

高校生でありながらアーティスト志向の生徒たちに囲まれ、それまで両親から教わったクラシック音楽の世界しか知らなかった渡辺さんは、モダンダンスなどまったく異なるアート形態と遭遇し、アーティストとして開眼していく。また、自宅を出て寮生活をしたことにより、精神的にも子供から大人へと急成長を遂げた。専攻はクラシックとしたものの、即興演奏、理論、歴史まで含め、ますますジャズにのめり込んでいった。

高校卒業後、渡辺さんはニューヨークに居を移す。マンハッタン・スクール・オブ・アーツという芸術大学で、ついにジャズを専攻し、ジャズ・フルートとテナーサクスを学んだ。ジュリアード音楽院のライバルと目される学校だが、当時、ジュリアードにはジャズ科がなく、ジャズを学べるニューヨークの大学とし

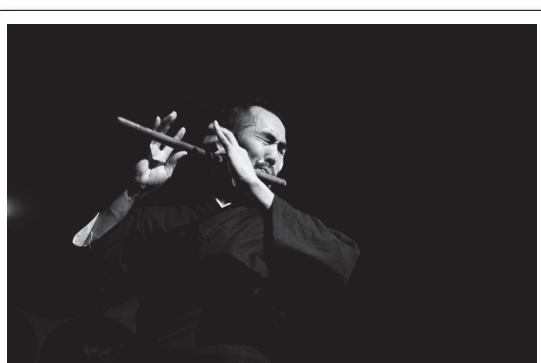
てはマンハッタン・スクール・オブ・アーツが最も名を知られていた。

■和太鼓集団、鼓童

以後、ニューヨークでジャズに対して切磋琢磨した渡辺さんは、やがて、ある疑問を抱えることとなる。

「自分とジャズに文化的なつながりは存在するのだろうか？……」

「黒人ミュージシャンと話していると、『父親がマイルス・デイビスが好きで、子供の頃から聴かされていた』とか、そういうエピソードが出てきます。黒人の文化が生んだジ



正しくは“篠笛”と呼ばれる日本の伝統的な笛で即興演奏。篠笛は、篠竹に吹き口と、指で押さえて音階を出すための指孔を開けただけのシンプルな造り



太鼓の演奏時、どれほど激しく叩いてもゆるがない姿勢は、厳しい訓練と自己鍛錬の賜物

Photo by Anya Rozhdestvenskaya

ャズを、彼らはただ好きでやっているのではなく、血から流れてくる音楽なんです。黒人として、黒人音楽を聴きながら生きていく誇りがあるんです。」

「僕はセントルイス生まれのアメリカ人ではありませんが、両親は日本人。ジャズを聴き出したのは17、18歳から。ただジャズが好きで、しかも大学で勉強している……。今から思うとナイーブな考えですが、当時は彼らに対して引け目がありました。」

さらに、日本通の黒人ジャズ・ミュージシャンと知り合い、その人物が秋田犬を飼い、日本の祭について論文を書いたことに「自分より日本のことを知っている」と驚かされた。さらには、そのミュージシャンが家族親族をとっても大切にしていたことにシヨックを受けた。

「自分は親しか知りませんでした

から。」

両親と兄以外の親族はすべて日本に暮しており、一家揃っての里帰りの際も、日本語が話せなかった渡辺さんはコミュニケーションを取る事が出来ていなかった。

このことがきっかけとなり、大学4回生の時にニューヨークにある和太鼓のグループに参加する。ここで日本のことだけではなく、第二次世界大戦時の日系収容所など、アメリカに於ける日系人のことも、ほとんど知らなかったことに気付かされることとなった。

「アジア系アメリカ人としてのアイデンティティが、まったくなかったですから。」

そして、ついにニューヨークのカーネギーホールで、新潟県の佐渡島を本拠地とし、世界中で演奏をする和太鼓集団、鼓童のコンサートを観ることになった。これが人生の一大

転機となった。

■太鼓で誰よりも大きな音を出す

「鼓童の研修生になるために日本に行きました。1997年です。祖母をよく知ることも目的でした。最初に日本語学校に通いましたが、『パーティがあるから料理をしておく』という例文があり、『〜しておく』が理解できなかったことを、今でもよく覚えています(笑)」

半年後、渡辺さんはいよいよ佐渡島に渡り、鼓童の研修生としての生活を始める。

「島に着いた最初の日、森で竹を割って、それを削って箸を作るんです。それで、その日のお昼ご飯を食べました。2日目は木切れをもらい、カンナで削って太鼓のバチを作りました。その後の一週間は田畑で農業。僕、花粉症なんで地獄でしたねえ(笑)。太鼓叩きに来たのに、な

んでこんなこと毎日何時間もって思いました。」

以後、日の出前に起き、古い中学校の校舎だった鼓童の練習所兼宿舎の長い廊下を雑巾がけし、室内スミからスミまでの掃除が日課となる。

「どうしてここまでキレイにするの?と、アメリカ人としては不思議でした。」

掃除の後に山中の宿舎を出て海沿いを10キロ走る際、真冬の雪の降る日でさえ、上半身裸でなければならなかった。

「強制じゃないんですよ。でも先輩が『ずっと裸で走ってきた』って、ま、強制なんですけど(笑)」

しかし、研修生の中で唯一の外国人だった渡辺さんは、逆に音を上げることは無かったと言う。

「アメリカ人扱いされたくなかったんです。絶対に負けたくないと思いま

した。誰よりも日本人の精神を持つ! 誰よりも長く正座する! 誰よりも太鼓で大きな音を出す!と。」

日本人であり、アメリカ人でもある

鼓童では太鼓以外に笛、三味線、唄、踊りもみっちり練習するが、本来フルート奏者だった渡辺さんは笛に入れ込んでいく。しかし2年後に準メンバーに昇格し、ステージで民謡を吹くようになった時、抵抗を感じたと言う。

「お客さんの中には長年、民謡を聴き、演奏する人もいます。僕は鼓童に参加して初めて民謡を聴いた。演奏するのが恥ずかしいというか、見せ物のような気がして、自分が嘘を付いているようにすら感じました。」

黒人の音楽、ジャズの演奏に躊躇して日本の伝統音楽に挑戦した渡辺

さんは、ここでも壁に突き当たってしまふ。しかし渡辺さんは、このコンプレックスを猛練習によって克服していく。日本語も、発音まで含め、徹底的に学んだ。

「日本に来て、日本のコア(核)を学び、体験し、迷いが消えました。今は『自分は純日本人ではないが、純アメリカ人でもなくなった』と感じ、同時に『日本人であり、アメリカ人でもある』と感じます。」

「ある国に両親がいろんな国からやってきて生まれる……世の中にそういう人はたくさんいるし、『自分だけ』と絞る必要はないでしょう。ミュージシャンとしての僕のアイデンティティは、笛奏者、渡辺薫です。しかし、ジャズもやり、太鼓もやります。」

鼓童のメンバーとして世界中を回り、最後は舞台演出も手掛けた渡辺さんは、2006年に鼓童を辞め、ニ

ューヨークに戻った。ジャズも含め、鼓童以外の音楽をやったこと、都下育ちの渡辺さんにとって、佐渡島は大好きな場所にはなったものの、外界から閉ざされ、刺激に乏しかったことが理由。

現在はニューヨークのブルックリンに日系アメリカ人でグラフィック・デザイナーの妻と暮らし、相変わらず世界各地と全米を飛び回り、多彩なアーティストとの演奏を続けている。

「今はまだ、自分の音楽を探している時期ですね。ジャズでもない、古典でもない、オーガニックな音楽をいろいろ探りながらやっています。そのうちに少しずつ定まってくるでしょう。」